

通信制教育課程受講者の音楽技能と音楽経験

—通信教育部保育科学生への調査をもとに—

久世 安俊 上田 浩平 江川 靖志 井上 幸一

Music skills and music experience
of the Correspondence Education Childcare Department.
-Based on a survey of students in the Department of Childcare,
Correspondence Education Department.-

Yasutoshi Kuse Kohei Ueda Yasushi Egawa Koichi Inoue

Abstract

This study examines the musical experience and singing / piano skill level of the Correspondence Education Department Childcare Department, and the factors behind it.

The target is a schooling participant, and a questionnaire is used to verify based on various information such as reading ability, understanding of basic knowledge, practice method, experience content and years, and motivation.

Keywords

Music, piano, vocal, Correspondence Education, Childcare Department, schooling participant,

1. はじめに

表現領域における音楽に関係する内容として「保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ」がある。（『保育所保育指針』）「歌う」「手遊び」「リズムに合わせて体を動かす」等の音楽・音楽的要素をもつ諸活動をより効果的なものとする意味において保育者の歌唱、伴奏等の音楽技能は重要なスキルの一つである。しかしながら保育者を目指す者の音楽技能水準は差異があり、その背景には個人の音楽経験（教育経験）やトレーニング等の諸要因があると推察する。

本稿は、保育者養成機関において保育士資格取得を目指す通信教育部保育科在籍者の音楽技能及びその背景としての音楽経験に焦点をあて、質問紙調査により実態把握を行うことを目的とする。また、通信教育部在籍者は一般の通学課程在籍者と比較して、年齢や社会的背景が多様である点に着目し、より効果的な実技指導の方略の検討に向けた調査として

の意味をもつものである。

2. 調査方法

(1) 対象及び実施期間

対象は、本学通信教育部保育科に在籍する学生 39 名（1 年次受講生、2 年次受講生）である。調査は 2020 年 8 月の夏季スクーリング期間に実施した。集計処理は Microsoft Office Excel を用いた。

(2) 質問紙

記述及び 5 段階評定によるものとし、質問項目及び内容は下記のとおりである。

- ① 音楽経験の内容（ピアノ、吹奏楽、合唱など）と年数
- ② 読譜力の自己評価[音符の長さ][楽譜に書かれた音符の鍵盤上の位置][拍子・リズム][調号][楽語][コード]の 6 項目
- ③ 自主練習の状況（直近 6 カ月の頻度と練習時間）
- ④ 受講目的
- ⑤ 性別及び年齢

3. 結果

(1) 音楽経験

図 1-1

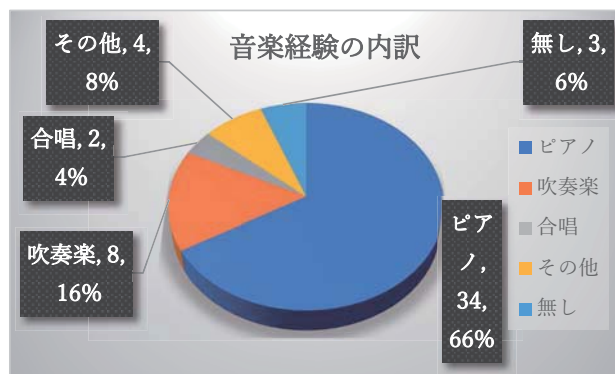
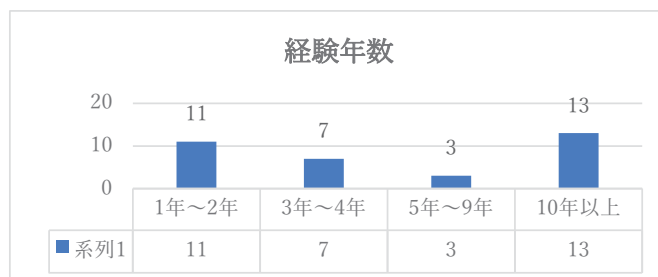


図 1-2



音楽経験の内容はピアノ 34 人 (66%)、吹奏楽 9 人 (16%)、その他 4 人 (8%)、経験なし 3 人 (6%)、合唱 2 人 (4%) であり、94%の在籍者が何らかの音楽経験、音楽教育を受けた経験がある。その他の内訳はピアノ以外の楽器の経験者である。

音楽経験の年数は、10 年以上 (38%)、1 年～2 年 (32%)、3 年～4 年 (21%)、5 年～9 年 (9%) とである。経験年数 1 年～2 年の者を初学者として捉えると 68%の在籍者が初心者ではない。

(2) 読譜力

図 3-1

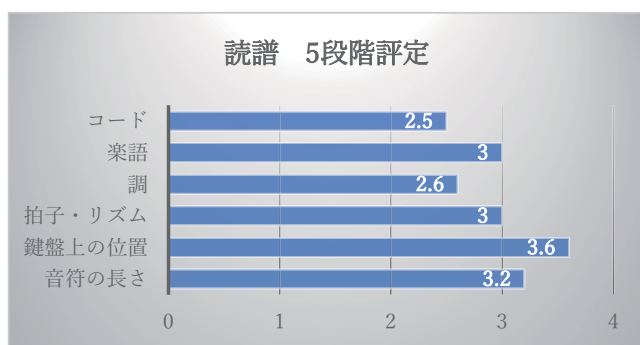
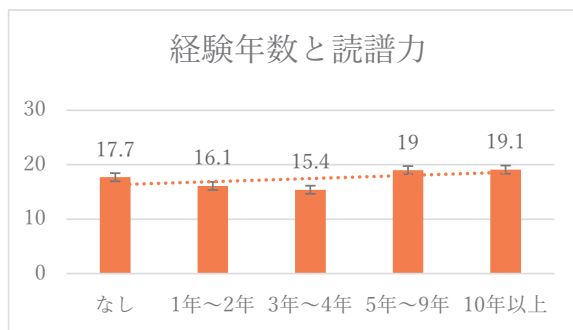


図 3-2



図 3-3



読譜力は「歌唱」「伴奏」の演奏において必要な6項目について、5段階評定【5：正確にわかる・4：ほぼ正確にわかる・3：だいたいわかる・2：あまりわからない・1：ほとんどわからない】により自己評価を行った。[鍵盤上の位置]3.6ポイント、[音符の長さ]3.2ポイント、[拍子・リズム]3.0ポイント、[楽語]3.0ポイント、[調号]2.6ポイント、[コード]2.5ポイントであった。演奏において最低限必要な[音符の長さ][鍵盤上の位置]のポイントが高く、付加的意味合いを持つ[調号]や[コード]（和音）のポイントが低いという結果であった。

音楽経験年数と読譜力の関係については初心者（経験年数1年～2年）より5年以上の経験者のポイントが高いが、経験のない者との関連は不明である。また、ピアノに加えて吹奏楽等の経験者は読譜力における自己評価に高い傾向があり、特に[音符の長さ][楽譜に書かれた音符の鍵盤上の位置][拍子・リズム]においては高いポイントとであることから音符を読む程度の知識を得ていると考えられる。また、[調号][コード]の2項目に関しては全体に低いポイントである。

(3) 自主練習

図4-1

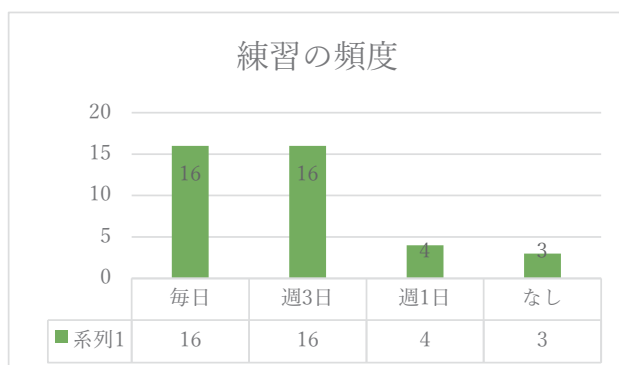


図4-2

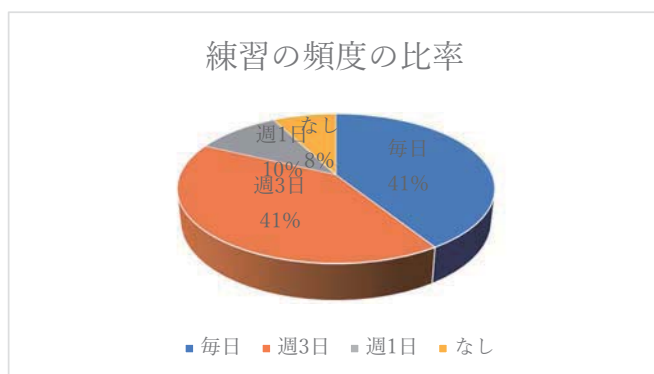
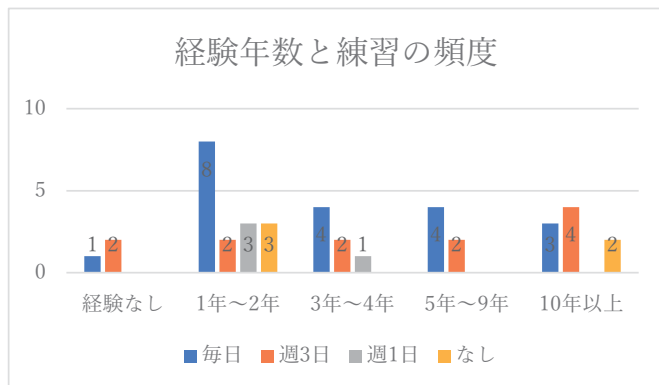


図 4-3



日常における自主練習の頻度は、週に3回以上を行う者が82%を占めている。また、初心者（経験年数1～2年）の毎日練習する比率が高い結果であった。

（4）受講目的

図 5-1

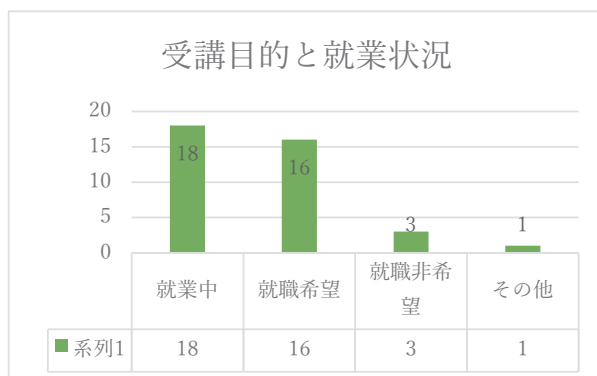


図 5-2

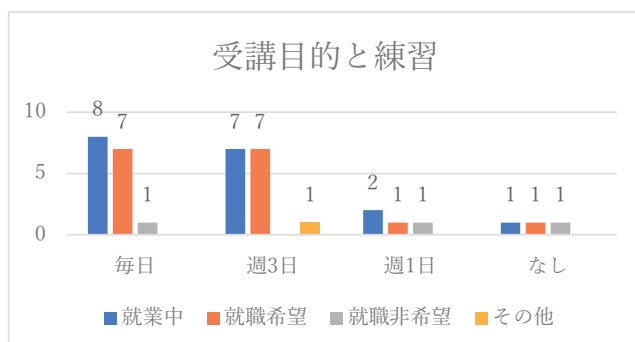


図 5-3

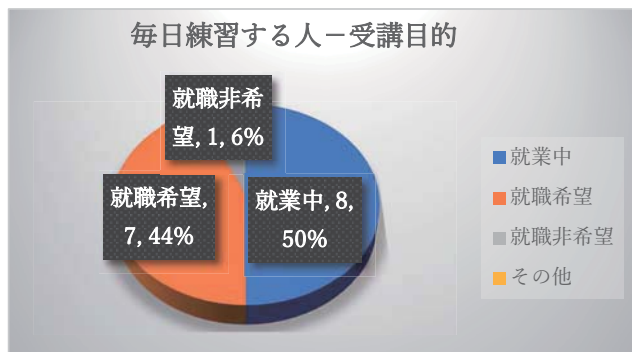
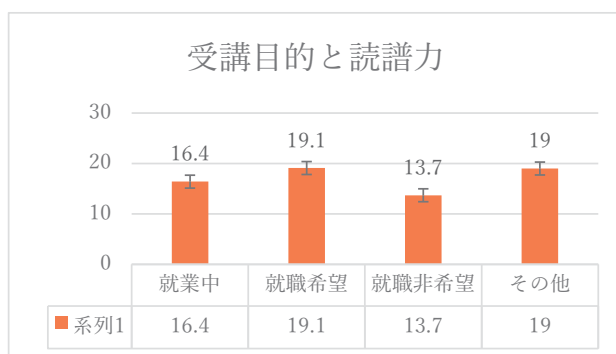


図 5-4



実際に就業中の受講生が 18 ポイントと最も多く、次いで 16 ポイントの就職希望の学生が多い点について、近い将来への明確な目的を持ち受講していることが背景にあるものと考えられ、保育士養成校の目標に直結した結果となった。

保育関係の仕事に従事している者の練習頻度は高く、園における子どもを対象とした音楽活動が練習の頻度を上げていると推察する。また、音楽経験が浅く読譜力のポイントが低い者が練習に時間を費やしていると考えられる。(就職非希望者は、資格・免許の取得のみを目的としている。) 就職希望者はピアノの練習と並行して音楽の基礎的な学習に取り組んでいる傾向がみられる。その他に分類された者のポイントは 19 ポイントであるが、1 名であるため、ここでの比較対象にはならないと考える。

(5) 年齢及び性別

図 6-1

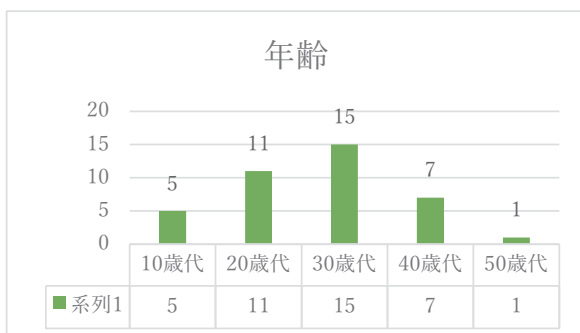


図 6-2

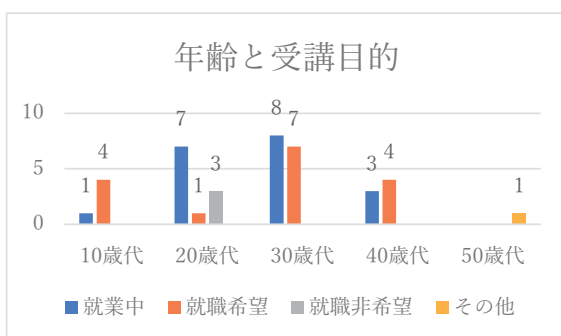
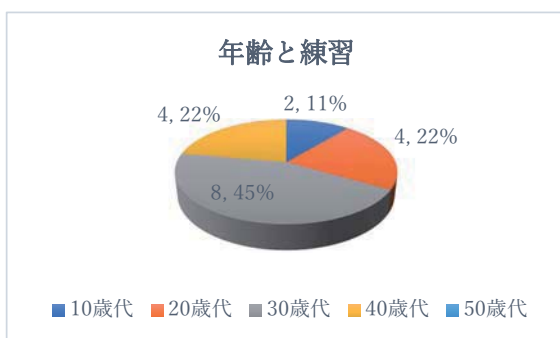


図 6-3



受講生は全て女性であり、30歳代が最も多く、次いで20歳代が多い。30歳代と20歳代の受講生が全体の64%を占めており、年齢層という視点からは「働く世代」「子育て世代」の資格取得のニーズが高いことが示唆される。また、就業中や就業希望に30歳代が多い背景には、子育て世代である30歳代が、実際の生活を通して受講を希望していることや、20歳代に社会で経験したことを通して保育士として働きたいと考えるケースがあるように思われる。また、自らのスキルアップや免許取得のために受講していることも考えられるが、通信教育部により保育士資格の取得を目指している点に注視したい。現在保育関係の仕事に従事している者が多い30歳代、20歳代は練習の頻度が高く、幼児教育の業務において音

楽スキルの必要性を認識していることが見受けられる。

4. まとめ

本調査によって得た情報及び推察を以下に述べる。また、本調査の目的は受講者全般の傾向及び実態の把握に基づき、実技指導モデルの基本的な方向性を見出すことにあり、個々の受講者・群の背景因子の検証は、今後の継続的なデータ収集をもとに行いたい。

(1) 音楽経験

10年以上の経験者とともに初心者（経験年数1年～2年）の比率が高い。このことから標準化された実技指導よりも個々の受講者の技能水準に合わせた個別的な指導内容が望ましい集団であることを再認識した。

(2) 読譜力

「音符の長さ」「鍵盤上の位置の理解」と比較し、「調」「和音（コード）」などの理解は不十分である。この点について、調（調号、調性）の理解には、音階の知識が不可欠であり、音階や調、和音の理解が不十分でありながら演奏経験を継続していくケースは一般的に多いことが背景にあると推察できる。（読譜力と音楽経験の因果関係については、さらなる検討が必要である）したがって、長期的な視点『保育士として働く』から、技能水準の向上を考えた場合に、「音符の長さ」「鍵盤上の位置の理解」の段階から《音楽・音楽の要素をもつ諸活動をより効果的なもの》となる音楽活動を可能とする段階へ移行する意味において、「音階」の理解が一つの鍵となることが考えられた。また、「和音（コード）」の理解については、音階上に構成された音組織として、音階及び調とのつながりから理解できることが望ましい点を考慮し、練習方法の検討が必要であると考ええる。

(3) 自主練習

自主練習は、週に3回以上を行う者が高い比率を占め、初心者（経験年数1～2年）と就業中の者の練習頻度が高い結果であった。自主練習を効果的なものとするためには、練習内容及び方法の検証が必要である。今後の調査においては、自主練習の頻度、時間とともに練習内容及び方法の情報をもとにスクーリングにおける実技指導内容との《むすびつき》の観点から検討したい。

(4) 受講目的 (5) 性別及び年齢

受講の目的が資格取得であることは当然であるが、受講者の半数が就業中である点に着目し、年齢区分及び経験年数と技能水準との関連について引き続き検討したい。また、受講者の年齢は20～30歳代の者の比率が高いことから、《就業》と《ライフサイクル》の観点から受講者ニーズを検討することは、学習プロセス及び実用的な指導モデルを開発するうえで、重要なポイントであると考ええる。

5. おわりに—今後の展望

通信教育部におけるスクーリング受講者の実技レッスンでは、基礎的音楽理論の知識を

補強するとともに、歌唱や伴奏の技能にむすびつく学習方略の必要性が示唆された。このことから学習方略の基本的な方向性としては、実用的かつ効率的な音楽技能習得プログラムと、音楽教育における〔共通事項〕に示された諸要素の概念の統合化などが考えられる。

また、通信教育部における受講者のニーズは多様であるが、社会人として仕事をしていくうえで役立つ知識やスキルを獲得するための学習（トランジションの観点）として、習熟度やキャリア形成の観点から教授学習方法を段階的なものとして検討することは重要と考えられる。さらに、通信教育部のもつ「社会人の学び直し」や異世代間の交流といった特性や強みを活かした教育プログラムの開発に向け、横断的かつ多角的に学習プロセスをとらえたい。

今回の調査では、実態把握としての一定の情報を得ることができた。今後は、個々の受講者の技能水準とその背景にある諸要因の検証に向け、データ収集を継続するとともに各受講生の実技試験結果、他の科目の成績（GPA）をひもづけ、データ分析を行うことを目指したい。また、音楽経験、技能水準の背景にある要因を検証することにより、効果的な実技レッスンの方略モデルの検討と、その構造を明確化することが課題である。

そして、領域「表現」の観点でも示されている、子どもたちが感じたことを自分なりに表現できるように、音楽技能を効果的に活用しうる発想力と創造力、また即興性を備えた保育者の在り方と指導法についても検討していくべきと考える。

参考文献

厚生労働省（2017）『保育所保育指針』チャイルド本社